



ぷらっとシネマ  
絶望のヘッドバンギング『ミス・マルクス』（S・ニ  
ツキャレッツリ監督）

メタデータ	言語: ja 出版者: 働く女性の人権センター いこ☆る編集局 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/0002000432">http://hdl.handle.net/10466/0002000432</a>



## 絶望のヘッドバンギング 『ミス・マルクス』(S・ニッキヤレツリ監督)

1883年3月、父カール・マルクスの葬儀を終えて、三女エリノアが参列者に挨拶している。プロイセンを出国して英国に落ち着いた父の波乱に満ちた生涯をふりかえる。先に亡くなった母との愛と信頼の関係をエリノアは誇らしく語る。

父の思想を継いで社会主義運動を進めるエリノアは、著述家・翻訳者としても重要な仕事にとりくんでいる。当時はどんな工場でも子どもが働いていた。その労働条件を「改良」する運動が常識であった時代に、エリノアの運動は児童労働を悪として「禁止」を実現した。労働者の権利擁護、男女平等など、社会主義とフェミニズムを結びつけて、彼女は活動を展開していく。

なにごとにも自信に満ちて堂々と見えるエリノアだが、胸中は不安と不信でいっぱいだ。敬愛する父だったが、実はマルクス家には長年にわたる父の不貞と秘密が息を潜めていた。しかしそれ以上に、エリノアの苦悩の元凶は恋人の劇作家E・エイヴリンとの関係である。浪費癖に借金、女性関係など、彼の不実と裏切りには何度も絶望させられてきた。ある日、突然訪ねてきた若い女がエリノアに言う―「エイヴリンの前妻が亡くなって自分と再婚したので別れてくれ」。絶望も極まったエリノアは死を選ぶことになる。

エリノアについては、かねてから関心をもっていた。マルクスとエンゲルスが『資本論』を書いたのは、19世紀英国の労働者の状況をつぶさに観察してのことだ。マルクスは英国で無国籍の亡命者として亡くなった。彼を支えたのが秘書役のエリノアである。彼女自身の、社会主義運動への貢献は大きいはずだが、偉大すぎる父の蔭で正当な評価がされていないのではと私は思ってきた。

エリノアの人生を映画化するに際して、監督スザンナ・ニッキヤレツリは凡庸な「左翼映画」にしないための表現上の挑戦をしている。私の見るところ、次の3点が重要である。

第1に、労働者の運動を扱う映画にありがちな集団シーンの多用による「迫力」の演出がないこと。マルクス一家に関わる作品である以上、社会主義運動を描かないわけにはいかない。しかし本作は群衆劇ではなく、監督は登場人物の孤独や寂しさを描こうとしている。エリノアが苛酷な工場労働の現場を訪れるシーンはあるが、労働者の姿

の多くは資料映像が使われていて、ほとんどが静止画である。つまり集団の演出がない。

第2に、監督が言うように、「安心感を与えるモラリズムは避け」ていること。まだ1日8時間という労働時間の基準もなく、労働者階級の子どもは働くのが当然であった時代を描くとき、現代人はその後に確立した労働権に立つモラルをもちだしたくなる。しかしそれでは、搾取と貧困に苦しめられるだけのパターン化した労働者像を表現することになりかねない。エリノアたちがしたアメリカ講演旅行の場面で、搾取の現状をカメラに向かって自分の言葉で語る労働者が次々と登場する。「左翼モラル」の説教に随すことなく、労働者像のパターン化も回避していて新鮮である。

第3に、時代考証をすっとばした音楽演出がされていること。ショパンの「ポロネーズ」、リストの「ラ・カンパネッラ」といったよく知られるクラシック曲が、独特のアレンジで使われている。「インターナショナル」の新アレンジも魅力的だ。圧巻は行きづまったエリノアが激しいロック・ナンバーで踊りまくるシーンだ。むろん19世紀にヘッドバンギングとは非現実的だが、エリノア役のR・ガライの熱演もあって、違和感はない。

それにしても、なぜエリノアは自死に至ったのか。本作の解釈は容赦なく残酷だ。エリノアは女性労働者を前に男女平等を説き、束縛としての結婚制度を批判し、男女が愛で繋がることを社会主義の理想として語っている。演説する彼女のうしろには社会主義運動の党幹部が援軍のようにならりと並ぶ。しかしエリノアは孤独だ。自分の言葉の一端を、自身が欺いていると知っている。「革命家カップル」の現実是对等な関係とは程遠い。エリノアは不実な男に利用され翻弄されながら、矛盾したことに自分から彼を求めている。社会主義運動活動家として発する自分の言葉は空疎なものでしかない。そう考えるなら、革命を追究するエリノアの人生はとうに終わっている。つまりエリノアがした死の選択は、単に愛につまずいたからというだけのことではない。

エリノアほどの人が、自分の発する言葉は革命の未来に繋がらないと考えるしかなかったとすれば、あまりに可哀そうだ。

(イタリア・ベルギー、2020年、107分)